

宮島大鳥居のひみつ



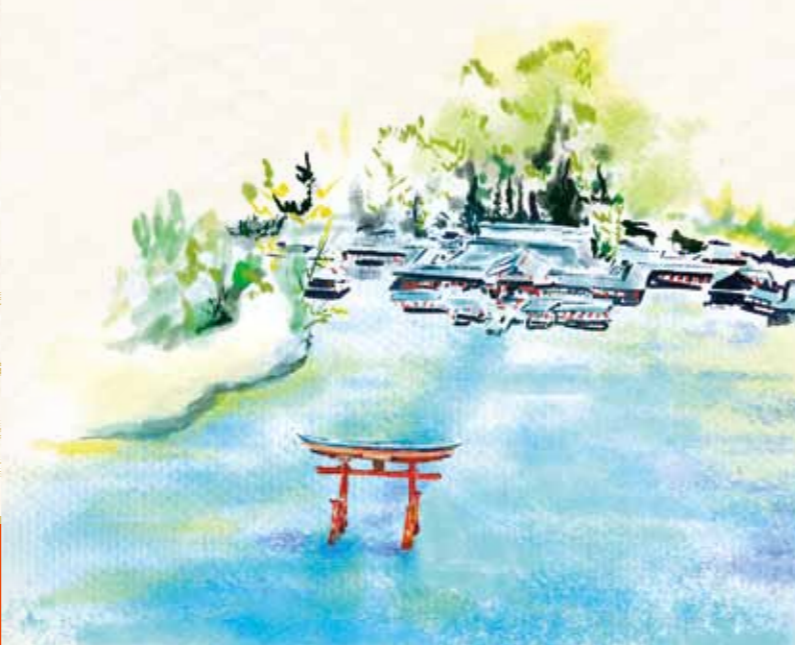
令和2年(2020)9月
県立広島大学宮島学センター

宮島学センターの活動については、こちらのサイトをご覧ください。
<http://mjp.pu-hiroshima.ac.jp/mjarchive/>



宮島の大鳥居

鳥居は、神社の神域を表示するための施設で、神社の出入口や参道の上に建てられます。厳島神社の大鳥居は、社殿から約160メートルの海上に北西を向いて立っています。木造の鳥居としては日本最大とされ、国の重要文化財に指定されています。



朱色のひみつ

厳島神社といえば、「朱の大鳥居」です。現在の大鳥居は平安時代末の平清盛の頃のもを初代とすると、8代目ということになります。明治8年(1875)に再建されました。

現在の大鳥居の再建当時は明治政府による神仏分離政策が進められていた時期で、厳島神社の朱塗りの社殿も仏教的であると非難され、柱の朱色を砂で掻き落としたと伝えられています。大鳥居も再建当時は着色されなかったと考えられます。現在の大鳥居が「朱の大鳥居」となったのは、明治42年(1909)から始まった修理の後です。

木造の鳥居だということ、よくわかります



〈「厳島名所」明治35年、宮島学センター所蔵〉

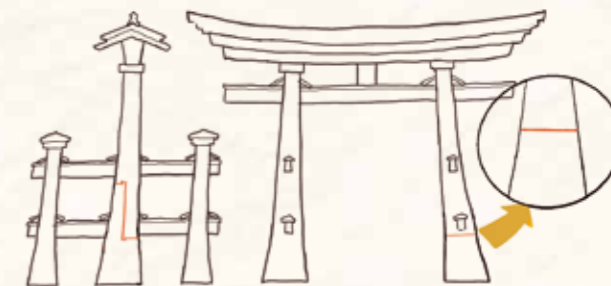
楠のひみつ

主柱(2本の太い柱)はクスノキ(楠)の自然木です。

楠は耐久性や耐水性が高く、樟脳の原料となることから防虫効果も期待できます。

何よりもどっしりとした根元の安定感が主柱に最適です。

5代目(戦国時代)大鳥居の楠は能美島(江田島市)から伐り出されました。6代目も広島周辺から伐り出されましたが、7代目は広島周辺では見つからず、和歌山県から船で宮島に運びました。8代目(現在)は、宮崎県都市にある住吉神社の楠を東側の主柱に、香川県観音寺市の豊浜八幡神社の楠と宮島塔岡の楠を継ぎ合わせて西側の主柱にしました。



赤い線が西側の主柱の継ぎ目

大鳥居年表

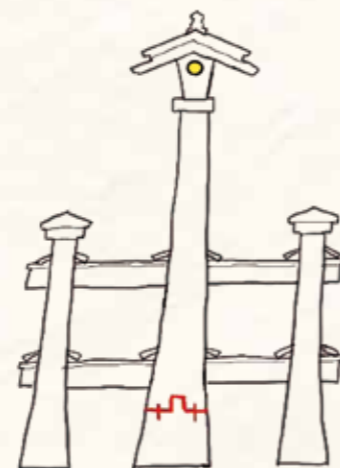
大鳥居(時代)	存続年代	説明
初代(平安・鎌倉時代)	存続年代不明	建立年代も失われた年代も不明。
2代(鎌倉時代)	1286 ~ 1325	現在の大鳥居と同規模。大風で倒壊。
3代(室町時代)	1371 ~ ?	2代が倒壊して45年後に再建。
4代(戦国時代)	1547 ~ ?	大内義隆が再建、後奈良天皇宸筆の額。
5代(戦国・江戸時代)	1561 ~ 1716	毛利氏が再建。歴代最長不倒。
6代(江戸時代)	1739 ~ 1776	主柱は広島県の楠で再建。落雷で焼失。
7代(江戸時代)	1801 ~ 1850	主柱は和歌山県の楠で再建。大風で被害。
8代(明治時代~)	1875 ~ 現在	主柱は宮崎県・香川県・宮島の楠で再建。

(参考文献)
『国宝並びに重要文化財建造物厳島神社昭和修理総合報告書』(国宝厳島神社建造物修理委員会、1958年)／『宮島町史 特論編・建築』(宮島町、1997年)

柱のひみつ(根継ぎ)

大鳥居の柱の根元は、満潮時には海水に浸かり、海虫が生きやすい環境になるため、傷みややすい部分です。

昭和25年(1950)からおこなわれた修理では、傷んだ柱の根元部分を切り取って新しい楠に取り替える「根継ぎ」がおこなわれました。主柱の根継ぎ用の大きな楠を探すことは困難を極めました。ようやく佐賀県内で見つかり、国鉄(当時の)貨車で宮島口まで輸送されました。



根継ぎのイメージ

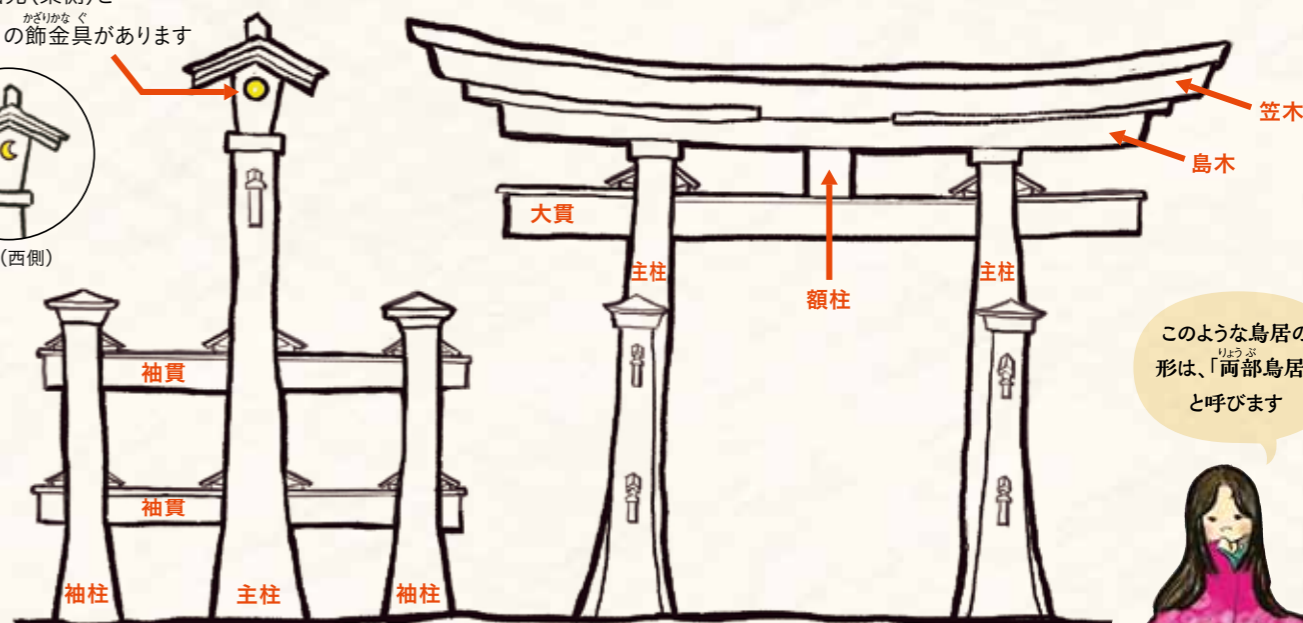
大きな楠が必要だったんですね



ここには、日光(東側)と月光(西側)の飾金具があります



月光(西側)



このような鳥居の形は、「兩部鳥居」と呼びます



主柱：2本の太い柱。楠が使われています。上部に島木を受ける円座があります。

袖柱：主柱の前後を支えている2本の柱。東西あわせて4本あります。杉が使われており、根元は楠で根継ぎされています。

笠木(上)・島木(下)：木材を組み合わせる箱状に作られ、内部に小石をつめています。笠木の東側の先端に日光、西に月光の飾金具が付けられています。

大貫：2本の主柱の上部に通す水平材。

袖貫：主柱と前後に立てられた袖柱に通す水平材。

額柱：ここに内外2枚の額がかけられています。

屋根：ヒノキ(檜)の皮で葺いています(檜皮葺)。

＊額のひみつ

鳥居の額はふつう1枚ですが、大鳥居には2枚あります。沖側(外)は「**厳島神社**」、神社側(内)は草書体で「**伊都岐島神社**」と記されています。

額の大きさは縦が約2メートル、横は約1.2メートルです。額縁を含めるともっと大きくなります。



沖側(外)

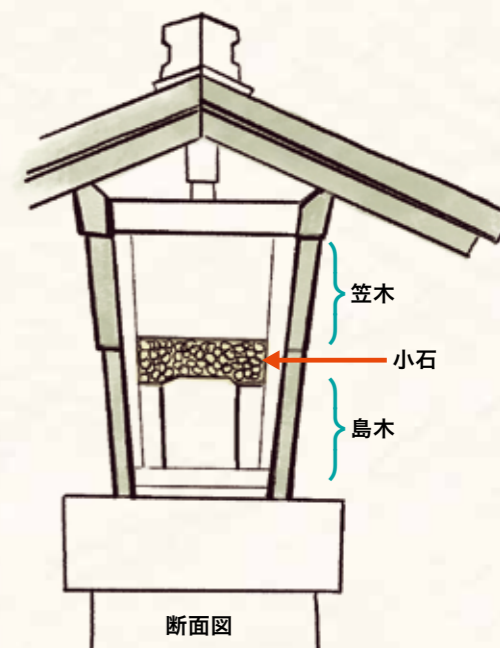
社殿側(内)

額は、厳島神社の御神紋や宝珠で装飾されています。また、沖側の額の左右の額縁には龍と雲が浮彫りにされています。



＊重さのひみつ

大鳥居の柱は地中に埋め込まれているように見えますが、実際には砂地の海底に置かれており、約60トンと推定される鳥居自身の重みで立っています。重さの秘密は、鳥居の上部にあります。屋根の真下の部材(笠木と島木)が箱状になっていて、中に約4トン分の小石が詰め込まれています。



サイズ・重さ

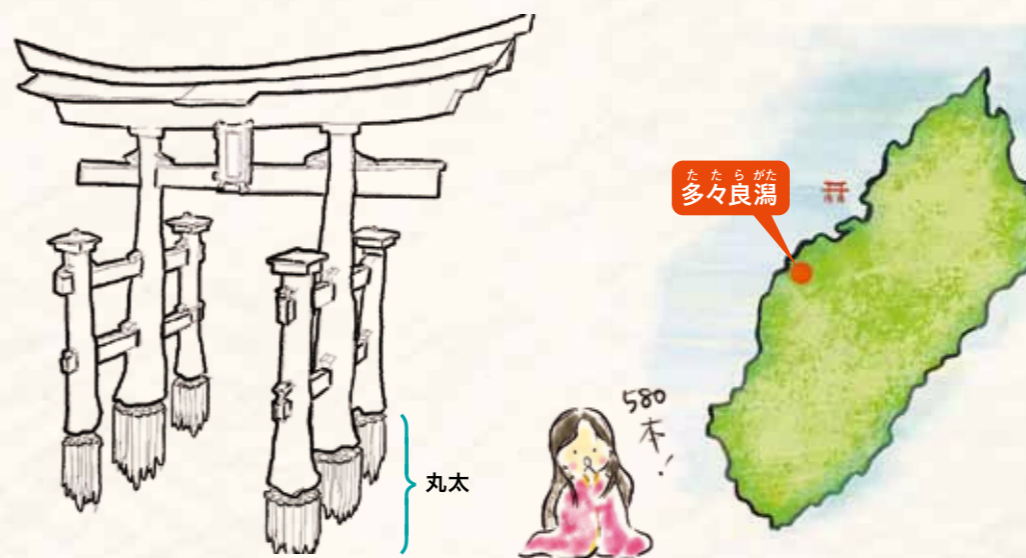
高さ：約16.6メートル
 棟の長さ：約24.2メートル
 主柱の根元の周り：約10メートル(西側)
 約8メートル(東側)
 袖柱の根元の周り：約5メートル
 総重量：約60トン(推定)

オスのアフリカンゾウ(6トン)
 10頭分の重さがあります



＊柱の下のひみつ

大鳥居の柱の下にはたくさんの松の丸太(杭)を打ち込み、地面を固めています。これを千本杭といいます。袖柱の下には約30本の丸太が埋められています。また主柱の下には計算上100本前後の丸太が埋められていることとなります。丸太の長さはおよそ3.6メートルです。現在の大鳥居が再建されたときの記録によると、宮島の多々良潟から「千本杭用」として松の丸太を580本伐り出したと記されています。



柱の下の基礎工事をおこなっている写真です。松の杭の頭が見えています。写真は『国宝並びに重要文化財建造物厳島神社昭和修理総合報告書』より引用しました。